

# 介護・地域リハビリテーション研修会

## 「日本の介護の未来を明るくするために～海外から見た日本～」

鹿児島県青年国際交流機構

日程：平成25年5月11日（土）

会場：鹿児島県青少年会館

参加者、スタッフ含め90名以上が集い、基調講演を始め、派遣報告やグループワークでも積極的に発言が交わされ、最終的に時間が足りなくなるほど盛会となりました。懇親会には30名の参加があり、引き続き活発な議論、今後に向けての課題や希望が熱く語られました。



日程	内容
13:00～14:50	基調講演「キラキラ輝く未来の創造～日本で働き続けるために～」 【講演者】吉本與史一（理学療法士 福井県） …平成19年度 スウェーデン派遣
15:00～17:00	シンポジウム「世界から見る高齢者、障がい者を取りまく環境～海外派遣報告と日本における実践報告～」 座長：吉本與史一 香川寛（作業療法士 広島県）…平成24年度 英国派遣報告 中元美々（介護福祉士 鹿児島県）…平成24年度 デンマーク派遣報告 村井真由美（作業療法士 鹿児島県）…平成22年度 ドイツ派遣報告 日高德子（介護福祉士 鹿児島県） …平成22年度 ニュージーランド派遣報告 二宮康公（作業療法士 高知県） …平成23年 オーストラリア ノーリフト研修報告 福島寿道（理学療法士 高知県） …「うるば高知」障がい者支援に関する実践報告 小林海斗（福祉用具展示センター相談員 高知県） …「被支援者から支援者へ」実践報告
17:15～18:00	グループワーク（その後、任意参加の懇談会）

### 鹿児島県IYEO会長 土井 敦

基調講演では、理学療法士として地域で活躍されている吉本與史一氏が、高齢者、障害者が地域で暮らし続けるための考え方や、リハビリテーションの目的、介護の主役である介護職の在るべき姿を自らの経験を踏まえて分かりやすく、また、これから迎える超高齢社会への希望とすべきことについても語りました。

派遣報告では、複数年度・分野からの「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」既参加者からの派遣報告（平成24年度の英国、デンマーク、平成22年度のニュージーランド、ドイツ）に加え、オーストラリアのノーリフト（持ち上げない看護）研修の報告や、高知県の非営利団体による障害者支援、就労実績の報告がありました。どの報告もポイントが絞られ分かりやすく丁寧に説明され、参加者からも様々な国の報告があつて良かったとの声が聞かれました。報告者にとっても、派遣の体験が実際にどうかされているか、振り返る良い機会になりました。

グループワークは、当日の盛り上がり様子から、自分の意見を発信していく場があつてこそ、双方向の研修ができるのだと再認識できました。グループワークの時間が短くなってしまったのが反省点ですが、どのグループも、話が止まらないぐらいに盛り上がり、参加者の皆さんは積極的に、笑顔で真剣に取り組まれました。

今回の研修会は、アンケート結果などから判断すると、目的はある程度達成されたと言えます。しかし、活動目的はあくまで「介護を取り巻く世界を明るくする」ことであり、研修会はそのためのツールであると再認識しました。目的達成のためには何が必要か、目の前の現場を見る視点と、社会情勢を確認する視点を併せ持ちながら、目的がぶれることなく活動を継続していきたいと考えています。鹿児島県IYEOの活動も、「慣例にならなくて」「例年通り」という視点ではなく、活動の目的を考え、今必要とされる活動を行っていくことが求められると感じました。

### <参加者からの感想>

介護老人保健施設 看護部長 女性

昨今、介護、医療の現場では、ケアに関わる人材不足が問題となっています。社会的な認識として、きつい仕事の割に低賃金であるため、優秀な人材が離れ、これからを担う若い世代が夢を持ってないといった側面が大きく取り上げられ、介護職員処遇改善対策として、国から補助金が充てられたりしている現状です。その制度も、改定により、処遇改善加算として残存しています。

しかし、人材不足への根本的な解決にはなっていない現状です。（中略）大切なのは、介護にかかわる仕事がいかに魅力的で、やりがいの持てる仕事であるか、という側面を現場から声を上げ、その専門性を明確にすることで、職域としての社会的地位を向上させることにあると思います。

今回の研修は、その役割を十二分に果たすものであったと感じています。基調講演から、シンポジウム、グループワークとどれをとっても非常に活力ある内容で驚きました。基調講演の吉本氏をはじめ、シンポジウム発表者の皆様の前向きな取組と、真摯に向き合う姿に、参加されていた方々も圧倒され、日々の現場で見失っていたかもしれない気持ちと目的を再確認することができたのではないのでしょうか。高齢になっても、障害があっても、地域の中で当たり前のように生活が継続できるためには何をすべきか、日ごろの業務に追われている我が身を振り返り、若い世代への教育にいかしていきたいと思えます。

一人一人が発信する力は小さくても、その思いが確実につながっていくことで、大きな変化につながります。これからも、若い世代を中心に、このようなつながりが続いていくことを切に願っております。その力は、確実に、子供たちに伝わり、これからの日本を背負う新しい人材の確保につながっていくと思えます。